

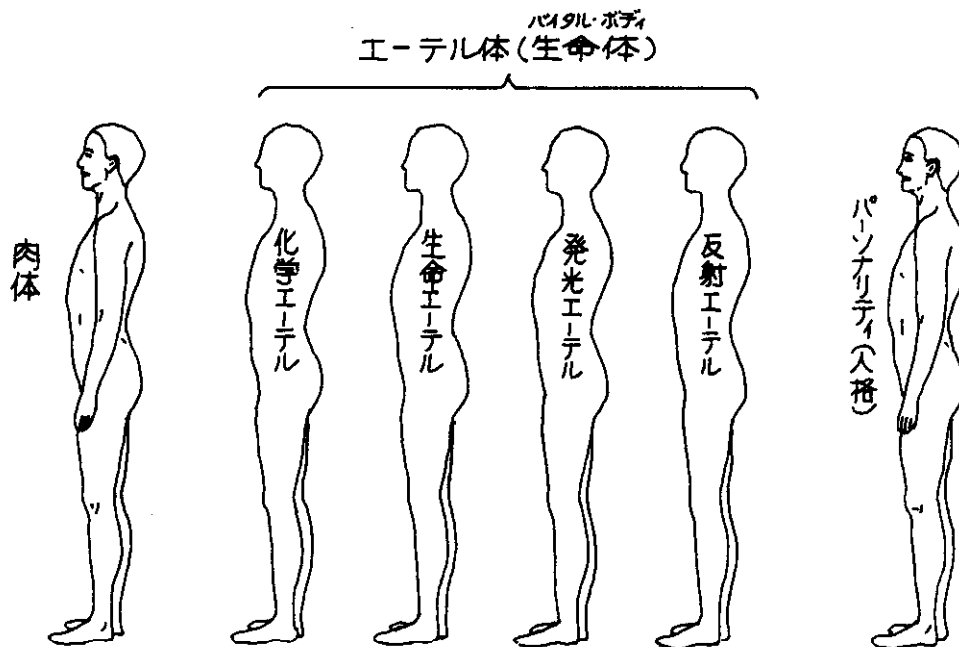
◁ 内的体、5つのセンター ▷

1. 生命をいとなむ我々の内的体

1号では我々、人間というものがどのような存在であり、どこに位置するのかを書きました。唯物的に肉体のみで成り立っているのではない、ということも感じていただけたでしょうか。我々はだれでも永遠の生命である魂と、有限な物質である肉体、そしてその間にあるエーテル（靈気）である霊、心理（サイキス）を持っています。今回は、その霊の持つエーテル体についてです。

エーテル成分（靈気）は生命を与える元、生命体（バイタルボディ）とも言われます。肉眼で見ることは不可能ですが、これによって我々の肉体が動き得るのです。ここで、ちょっと想像してみてください。色のちがうセロファンを何枚か重ねて透かして見ます。全部の色が混ざり合った一色としてしか我々の目には見えません。そこに何種類の色がある、と即座に見極めることはできません。このように、我々は内的にいくつもの目に見えない体を持っています。

大きく分けると生命体は4つに分けられます。



- ①化学エーテル——人体の有機的な生理機能を受けもつ。消化、吸収、解毒、体温調節など、いわゆる内臓諸器官を動かせる
- ②生命エーテル——生種機能を司る。
- ③反射エーテル——記憶、想像、意志の働き。
- ④光エーテル——超常機能（超視覚、超聴覚、直観力、テレパシーなど）知覚の働き。

これらのエーテル体（生命体）は4つにバラバラに分かれて存在するのではありません。働きという面から分類して説明しているだけで、互いに溶けあい、ひとつのエーテル状のものとして存在しています。

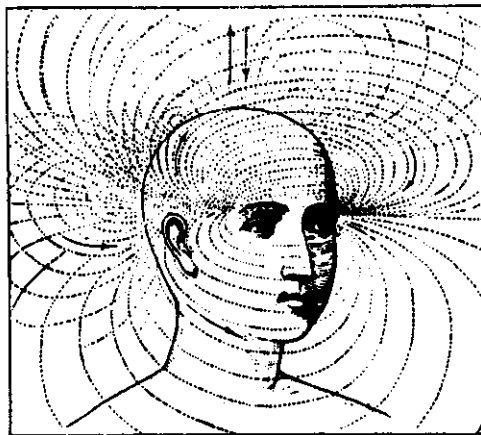
我々は目に見える肉体のほかに、このエーテル体、そしてほかにも全部で6つの見えない体を持っています。肉体は最も複雑な凝縮された濃密な体と言えます。見えない体はちょうど玉ねぎか、らっきょうのようなものにたとえられます。一番外側の皮が今見ている肉体、そして何枚も中心まで重なり合っている皮が我々の見えない体に相当します。エーテル体（生命体）、アストラル体（幽体）、メンタル体（精神体）、コーザル体（原因体）、神聖霊、魂などと呼ばれます。これらはこれからのテーマにそって説明していきたいと思います。これらのいろいろな内的な体は、気体のように不可視な非常に繊細な存在です。ただ霊的な機能、本質によって区別するだけで、ひとつのものとして存在しています。そしてこれらのすべてに最も神聖な魂が宿っているのです。

大事なことは、我々が肉体・霊・魂から成り立つ存在であり、三次元の物質的なこの世で社会や学校、仕事、家庭を通して生き、目に見えない世界ではこの見えない体を使って生きている、生きていくということを理解することです。そして肉体の存在するこの世は、限られたごく一部の世界、ほんの一時の時間であり、永遠の生命を生き得る世界はあまりにも深遠高大であるが故に、そしてまた肉眼で見ることができない故に、人々はその真実の姿を信ずることが大変困難です。

しかし、生まれてから一度も夢を見たことのない人がいるのでしょうか。夢はどのようなものでしょう。後の夢のテーマの時に詳しく説明しますが、エーテル体との関連で少し説明してみます。我々は必ずある程度の間隔をおいて眠ります。眠らずに健康を保つことはできません。この眠りというものは、我々の肉体的な機能を正常に保つために、また日中の心理的なストレス、感情の動きなどによって詰まってしまった神経チャンネルを洗浄するために欠くことはできません。眠っている間に、生命体の中の生命エーテルだけが体内に残りその機能を果たしているわけです。我々のほかのアストラル体などはすべて外に出ます。そして外へ出て持つ体験、それが夢です。ですからなせ、夢を自覚し、夢の中で意識を持たねばならないか、おわかりになると思います。起きている間にどんなに正直に過ごしていても、もし夢の中でごまかし行為を犯すなら、それはその人自身が誤りを犯していることになります。もし自分が心底、正直な人間になりたいと願うな

ら、可視の世界、不可視の世界、すべての世界において正直に生きるよう努力しなければなりません。夢というものを正しく理解するなら、たとえ自分自身がほかの次元の世界を実際に体験していなくとも、自分の存在の真実を多少とも実感することができるのではないのでしょうか。

ここで皆さんはもうお気づきでしょうか。我々の肉体は、それだけでは決して動かすことはできません。ぬけがらのようなものです。そこに生命を与える生命体が関与しなければ、我々は全く動けず一時も生命を保つことはできません。

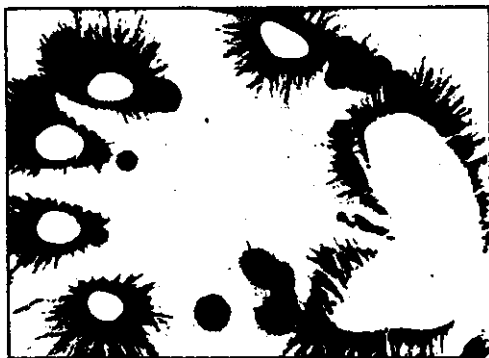


●人間の頭部を取り囲んでいる霊的磁場におけるエネルギーの磁力線。バビットによれば、これらのエネルギーは、非常に速く離れた人々に影響を及ぼしたり、誘引したり、また治療するために投射できるといふ。
●バビット著「光と色の諸原理」より。

とすると、我々の多くが苦しんでいる病気も肉体が病むのではなく生命体が病み、それが肉体に結果として表われたのです。「病は気から」という言葉も人間の中に隠された深い意味を表現していると思います。しかし、病気の本当の起源を知らずに、どれ程の治療が可能でしょうか。今の医学がこの人間の成り立ち、エネルギーの在り方の真実を知らない限り、本当の治療と健康を我々に与えてくれることはありません。

オーラ

皆さんはキルリアン写真、キルリアンカメラという言葉をご存知ですか？これは1940年代にソ連のキルリアン夫妻が開発した電気写真、高電圧写真技術です。



キルリアン写真

よくバランスのとれた1才児の強い放射と、形の整った内的コロナを表わしている。

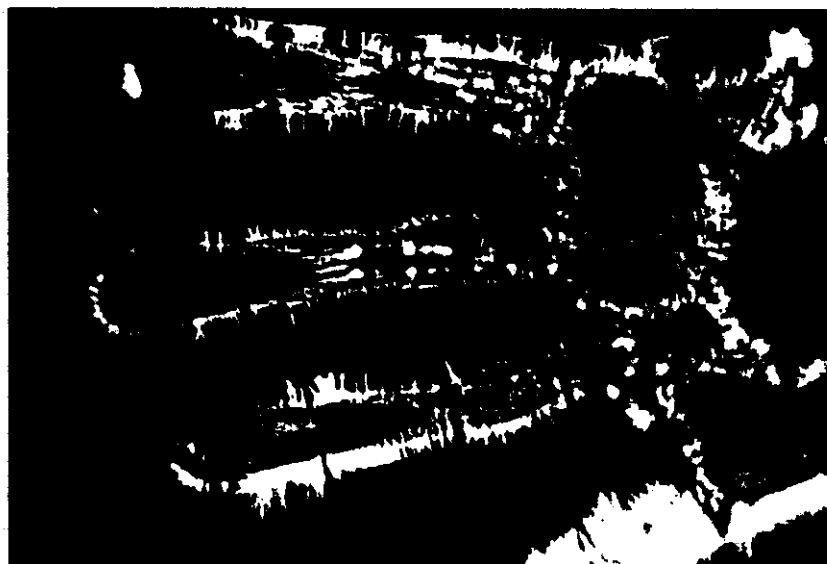
彼らが高周波の研究をしている時、その設置の電極棒から出た電気火花が患者に当たるのを見ました。そこで患者の手と電極棒の間に写真の感光板を置いて写してみました。それは指の輪郭を描いた発光があり、指先からエネルギーが放射されているようなものでした。キルリアン夫妻はこの発光を連続的に観察できるように、改良した機械を作り研究を続けました。皆さんに写真やスライドを使って実感の伴う説明ができませんので、キルリアン氏の言葉を引用します。

「今まで経験したこともないようなすばらしい光景であった。手は絶えず動き続ける見事な色で光り、輝き、火花を散らしきら

めきながら変形していった。光の一部分は動いているように見え、またある部分は脈を打っているようであった。……それはまるで巨大なコンピューターが、情報を読みとるために常に調整している映像面のようなようであった。」

どのようなイメージが浮かびますか？この発光、内なる体はオーラとも言われます。オーラとは、微風を意味するギリシャ語のauraアウラに由来します。生命の

キルリアン写真



手掌（オーラに出る思考の影響）



治療者に触れられる前(左)と後(右)
の全葉パンのひときれ。

あるものには動物、植物、人間、すべてにオーラがあります。我々の持つエーテル体（生命体）はオーラの原料になります。オーラを肉眼で見るとはできませんが、我々のオーラは普通、全身を包む縦長の楕円形の発光体、放射体として見えます。リードビーターという人が超視覚によってとらえた、多くの状態を示すオーラのスライドがあるのですが、皆さんにお見せできないのが大変残念です。我々のアストラル体、メンタル体等、また激怒、残忍、けちん坊、うつ病、情欲、母親の情愛、魂の光が輝いているオーラなど、言葉などいらない一目瞭然の印象を与えるものです。ですからオーラによって健康状態、心理状態、病気、性格等、無言のうちにもその人物を判断できるわけです。

英国心霊術者協会の一人の長老の例をあげてみます。

ある時彼は、ロンドンのデパートの最上階でエレベーターに乗ろうとしました。しかし、エレベーター内に漂うある種の生気の無さのために、彼は乗らずに見送り、そしてすぐそれは乗客全員がオーラを持たぬためだと気付きました。そしてエレベーターはケーブルが切れ、乗客もろとも転落してしまいました。このように生命力の放射物であるオーラは、未病、死をも知らせます。

またキルリアンは、もぎとったばかりの一枚の葉の为程を切っしめし写真をとつても、数時間はもとの葉の形を正確に映し出すことを証明しました。手足を切断された人が失われた手足を感ずることにも理由があるわけです。

もうひとつの例、レニングラードの名外科医、ミハイル・ガイキンは鍼治療で用いるツボを描きこんである人体図をキルリアンに送りました。キルリアンは数ヵ月かけて研究し、写真の光斑とツボが重なることを確認もしました。

オーラの写真やキルリアン写真はちょうどオーラの写真を眺めているようです。太陽風が地球の大気と磁場に変化を持たらし、それによってあのだとえようもない美しいオーラが生まれます。太陽は人間の魂を、地球は人間の肉体を象徴しています。そして人間にあっては、魂のエネルギーが高められた時、ふるえるような感動、祈りや深い瞑想の時など、我々のオーラもぎっと吸いこまれそうなオーラに似て輝いているのではないのでしょうか。

パーソナリティ

さて、我々が肉体と不可視の体と全部で7つの体を持っていることとお話しました。その我々を包むもうひとつのエネルギーがあります。それが我々の一番外側にあるパーソナリティ（人格）というものです。これは人間の受精の瞬間から、一瞬一瞬形成されていきます。胎内にある時は母親の心理状態、感覚などを通し、また誕生後は環境や行動も加わりその人物のパーソナリティを作っていきます。それによって個人の癖、嗜好、習慣などができあがります。我々のエゴ（我）もこのパーソナリティの中に形成されていきます。ですからエゴというものは、我々の一番外側にあつて頑固な分厚いカラを作り、我々をそのカラの中に閉じこめ窒息させてしまう存在です。現実には、我々のエーテル体はだんだん弱まり、我

々の魂、光輝くはずの魂がその光を増すことも発揮することさえもできずに、がんじがらめにされているわけです。このエゴのテーマは非常に重要なので、後に詳しくとりあげます。

本当の調和

このような現実を知れば知る程、我々は常に自分が何をしているのか、しようとしているのかという自覚、意識を持たねばならないと痛感する

のではないのでしょうか。ノーシスは、我々に心理と肉体との相関関係とその調和を自分自身で計っていくことを教えます。

我々が一般的に知識を身につけるとする場合、それらの知識は分断され根元を絶たれてしまったような細切れの知識の寄せ集めになりがちです。表面的な知識は我々の頭脳、インテレクトという情報収集室、データベースにためるだけのものです。それ以上の力はありません。真に奥深い純粋な知識は、たとえ我々の頭や観念がそれを理解できず拒否しても、その人自身の魂や意識は正しい判断をしています。しかし、エゴに閉じこめられているためにその声が聞こえません。我々の持っているものの中で、何にもまして大切なのは魂です。現実の我々は個人個人も社会全体もあまりに煩瑣し物質的、表面的価値だけを重視して生きています。しかし、すべての中心は魂にあります。でも現実の生活を生きねばなりません。ですから魂の神聖さ、その重要性、霊、心理、そしてこの人生を生きるのに必要な肉体、それぞれにそれなりの重要性があります。だからこそ、それらすべてのバランスを整え、正しく動かさなければならないのです。

2. 内分泌腺とチャクラ

さて、人間の体には7つの主要な内分泌腺とそれに霊的に対応して表われるチャクラというものがあります。初めに内分泌腺について簡単にふれてみます。

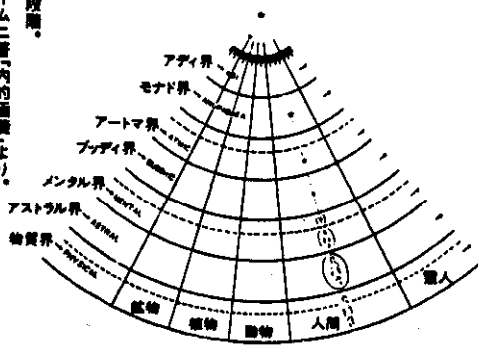
内分泌腺

内分泌腺は我々の血液の流れの中にホルモンを分泌します。ホルモンという言葉はギリシャ語の「動きを惹起する」あるいは「動き始める」に由来しています。我々の健康維持、身体の諸機能の調節等、内分泌腺は全体に深く影響しています。

① 生殖腺—— 睾丸 } 生殖作用に関係する。
 卵巣 }

② 副腎—— 心搏促進、腸、皮膚の血管収縮の調整、肝臓からの余分な血液、糖分を筋肉へ供給。体内から副腎が除去されると速やかに死に至

学生の間接的。
「エクソタイムニクス」の「時間」より。
ロンドン、一九〇七年。



背柱上の七次チャクラ

チャクラ
 頭頂(サハスララ)
 前頭(アジナー)

七つの輪——統制系統
 松果腺——上部の脳、右眼
 脳下垂体——下部の脳、左眼、
 耳、鼻、神経組織

嚔喉(ヴィシュダ)

甲状腺——声帯、気管、消化器管

心臓
(アナーハタ)

胸腺——心臓、血液、迷走神経、循環器系統

太陽神経叢
(マニプーラ)

膵腺——胃、肝臓、胆嚢、神経組織

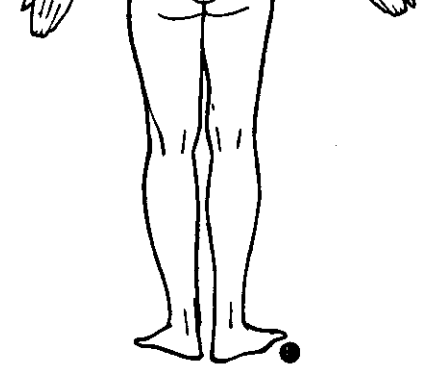
仙骨
(スワデシアスターナ)

生殖腺——生殖腺

背柱の基座
(ムラダーラ)

副腎——腎臓、腎臓

●「七次チャクラ」
 D.V.タンズリー著「電子工学と人体の霊的解剖学」より。



- る。
- (3) 脾臓——消化促進、体に熱とエネルギーを供給するため、血糖を減らすよう肝臓に指示。
 - (4) 胸腺——普通は青春期までは成長しその後は退化すると言われ、近代医学も明確にはとらえきれていない。しかし免疫反応、ストレス状態の解消に副腎と共同作用をすると考えられている。
 - (5) 甲状腺——身体全体の新陳代謝、知力に係わる。副甲状腺(上皮小体)は体内のカルシウムとリンのバランスの制御、生命にとって欠くことができない。

- (6) 松果体——近代医学においてはまだ解明されていない。しかし、光の刺激によって神経の反応が生ずるといふ実験報告もある。
- (7) 脳下垂体——これは7つの内分泌腺の制御者的な役割を持つ。すべてがバランス良く働いていれば休み、ひとつでも不足するならばその腺に対して刺激性ホルモンを出しバランスを保つようにする。

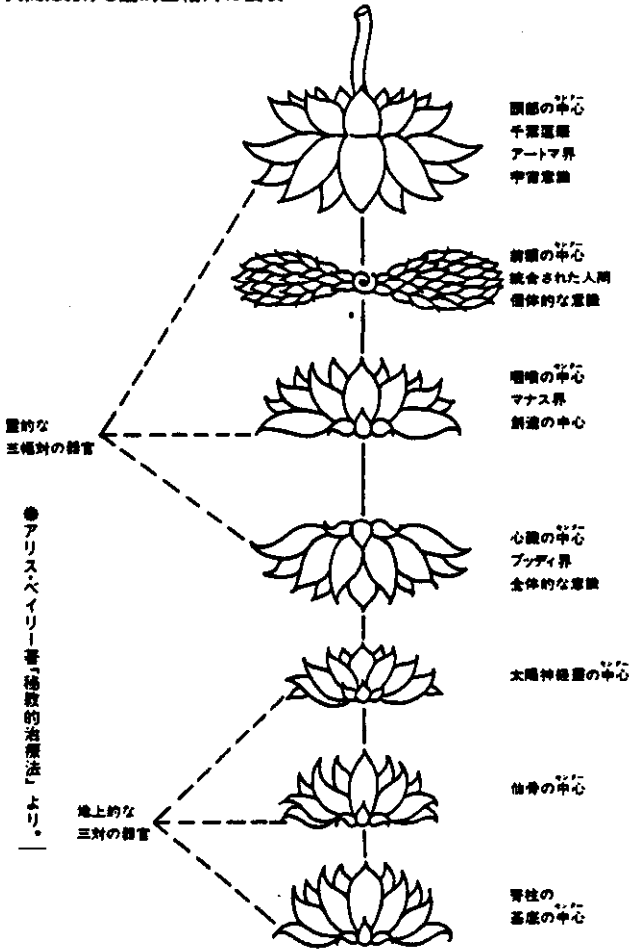
チャクラ

このチャクラという言葉は車輪という意味のサンスクリット語から来ています。乗洋の経典は宇宙全体を、ひとつの巨大な曼荼羅か、無数の小宇宙的な車輪を含んでらせん運動をしている大車輪としてとらえて語っています。

チャクラは我々の目に見えないメンタル・アストラル・エーテル体を包含したエネルギーの渦巻のようなものです。チャクラについては文献によって一致しませんが、身体の内臓腺に対応する主要な7つのチャクラがあります。ここでは、インドのタントラ・ヨーガ(密教ヨーガ)の説明を中心に小けてみます。

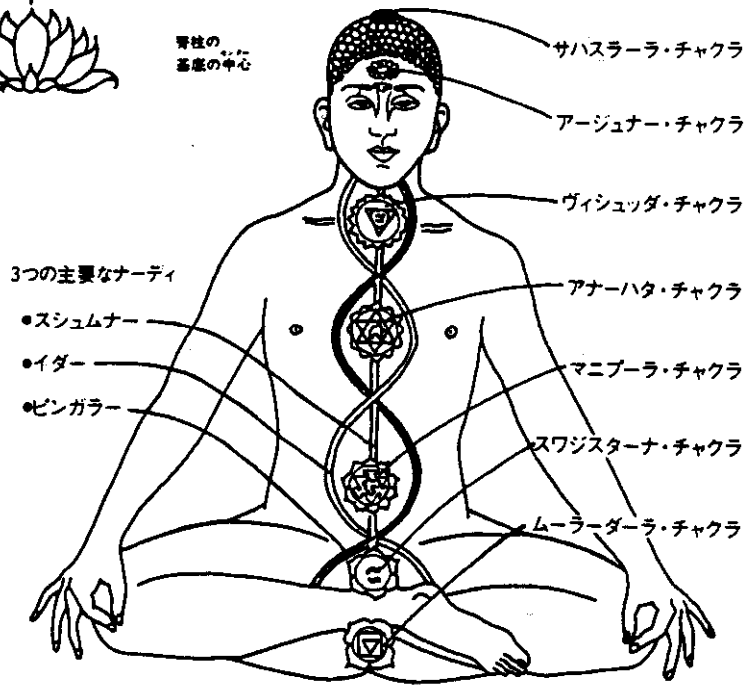
我々のエーテル体の中にはプラーナ(生命力、万物に生命を与えている宇宙的な生命力)が流れる無数の通路があります。このプラーナの通路はナディ(経絡)

人間における霊的三輪対の反映



●——松果腺と脳下垂体から流出するエネルギーは、虎と蝶によって象徴され、それらは「第三の眼」を形成するために、頭部という錬金術の窯の中で混合される。普通教の図版、中国。

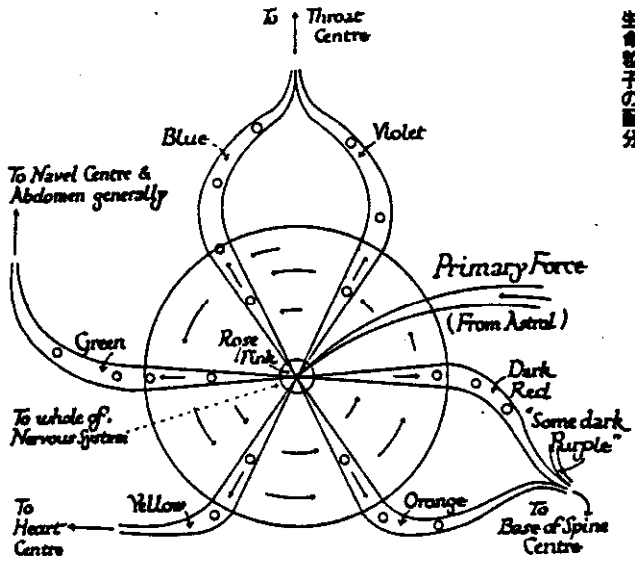
と呼ばれます。中でも重要なのは、背骨のところを走るスシュムナ。その背骨に左右かららせん状に上昇しているイダとピンガラと呼ばれる3つのナディです。イダは女性ホルモン、月を象徴し、ピンガラは男性ホルモン、太陽を象徴しています。タントラヨーガの伝統的チャクラの図では、それは四角、三角などの



3つの主要なナーディと7つの主要なチャクラ (Arthur Avalon "The Serpent Power" より)

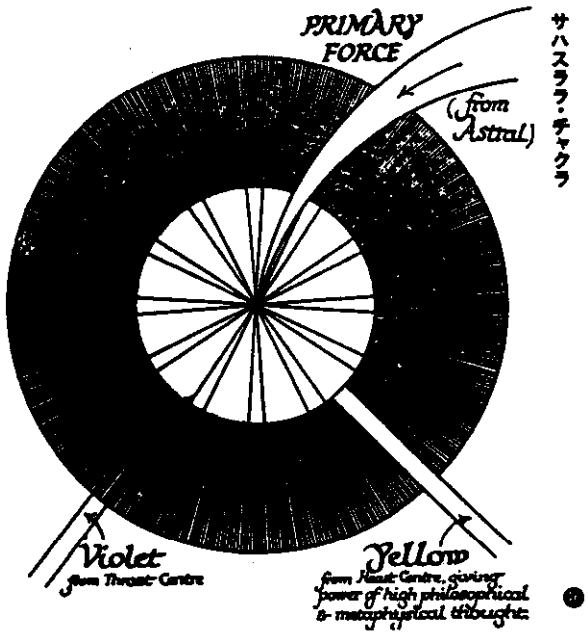
脾臓の中心
生命粒子の配分

●太陽の生命エネルギーは「脾臓のチャクラ」によって吸収され、エーテル体によって肉体に分配される。
●「脾臓のチャクラ」
A.E.ポークウェル著「エーテル体ダブル」より。



- 1 「生命の中心」が中心に位置せよ。
- 2 それらは粒子に分派せよ。
- 3 分配された「生命の中心」は「脾臓」である。
- 4 「生命の中心」によって「脾臓」は「脾臓」である。
- 5 「生命の中心」は「脾臓」である。
- 6 「脾臓」は「脾臓」である。

●C.W.リードビーターによる、クラウン・チャクラ(サハスララ・チャクラ)におけるエネルギーの受容と分配の図。
●「クラウン・チャクラ」
A.E.ポークウェル著「エーテル体ダブル」より。



- 外環
中心部分—黄金色を放射している輝かしい白光
外環部分—各状に輝く色光に満ちた輝かしい白光
チャクラの層の厚さ
中心部分—12
外環部分—900
アストラル体のチャクラの位置—完全に発達した霊的精力
エーテル体のチャクラの位置—恒久的な意識の形成

幾何学的図形や梵字、男女の神々、蓮の花、花弁などで描かれています。このチャクラは訓練することによって、いろいろの周波数で送受信を行うラジオ局のように働きます。この働きを高めたチャクラは、色、音、密度など変化する渦、また渦を巻いている水面のように、そして非常な速度で回転し、時には光輝くエネルギーの球体として見えるそうです。未発達な人においては、エーテル体の表面に皿のような窪みがあるだけだそうです。聖書では「車輪の中で回転しているさらなる車輪のごとく」と形容しています。聖ヨハネがチャクラを表わす封印を、黙示録の原本で体の背中側を意味する裏表紙に記した、ということには深い意味

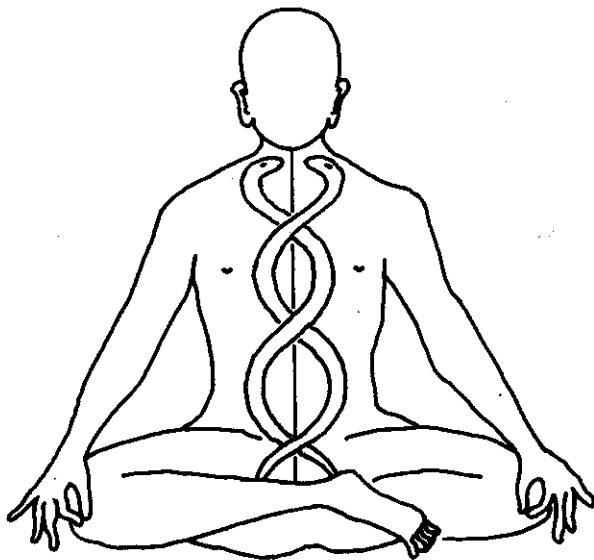
がこめられていると言えます。このチャクラについては超常機能のテーマの時にまた説明します。

クンダリーニ

さて、我々の背骨、脊柱の底部にはクンダリーニというものがあります。すべてに二面性があるように、宇宙の創造も動的な面、静的な面に分かれ、タントラ・ヨーガはこの二元性、二面性を結合し根源の一に至ろうというものです。根源の一、至高をらせん状にとりまく動き、^{マハ}力があります。この力をマハ・クンダリーニ（偉大なる巻かれた力、宇宙の聖なる母）と呼び、この宇宙的な力が我々の中にも存在しデビ・クンダリーニ（内なる聖なる母）と呼びます。わかりにくいかかもしれませんが、宇宙の絶対から放射された創造力であるクンダリーニは、多くの不可視の世界を創造し、最後に物質界を創造し我々の体内に至ったというわけです。そして再びその起源に至るのを願っていると云えます。我々の持っているクンダリーニは、とぐろを巻いた蛇の力で表わされる偉大な、根源的な力です。この背骨からみつぎ上昇していく二匹の蛇は、我々の副腎の末端神経が、DNA（我々の遺伝に関係しているもので、細胞の核の中に存在）に見られる二重らせんと同じ形で背骨を上昇していることを想起させます。



● 火の創造的なエネルギーをあらわす、オルフェウスの秘儀の象徴である蛇が、宇宙を意味する卵（宇宙卵）に巻きついている。卵は、また、哲学者（賢者の魂を、蛇は、神秘的な教義を象徴するものである。巻くオルフェウスの卵。J. フライアント著「古代神話の分析」より。



● DNA分子を含む核酸に見られる螺旋状の結合。

3. 5つのセンター

また、我々の体にはそれぞれの機能を果たす5つのセンターがあります。これらのセンターにも、それぞれ二面性があります。

① 頭脳センター（インテレクトUALセンター）

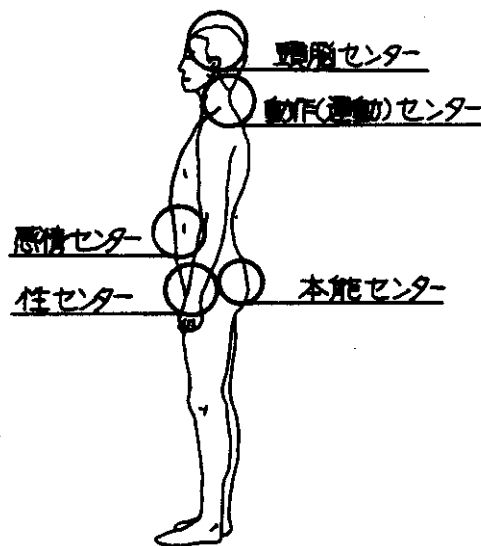
我々の頭部にあり、一般的な情報、知識というものを集積するデータバンクです。しかし物事の本質に至るものではなく、すべてに“はい”（○）か、“いいえ”（×）だけの判断しかありません。ですから自分がこれまで習ったこと、知っていることしか認めることができません。しかし、これは本当の理解ではありません。このセンターは単なるデータ室の機能しかなく、知性ではありません。日本ではインテレクトという英語を知性と訳して使っていますが、インテレクトは心理（サイキス）に属し、理性的に考えるものです。知識は受けとった情報のことであり、知恵（ウィズダム）は神聖なエッセンスです。本当の知性はインテリジェンスであり魂の働きです。ですから知性の中には真の教智を含み、すべてのものの本質を直観的に受けとることが出来ます。

このセンターのポジティブ（+）な面は、肯定、はい（イエス）と受け入れることであり、ネガティブ（-）な面は否定、いいえ（ノー）、拒否です。このインテレクトだけで自分自身をコントロールしようとする、それは自分に大変悪影響があります。正しい情報のみによって、自分のバランスをとらなくてはなりません。

② 本能センター

尾骨（尾髄骨）のところにあります。人体全体の本能を司り、有機的機能をコントロールします。呼吸、消化など、動物的、肉体的なものであり、我々が習って行っているのではなく最初から本能として備わっているものです。このセンターは次にあげる動作センターと関連して働きます。この本能と直観を同じ意味に理解しやすいと思いますが、それは違います。直観というものは物事の本質を感じるものであって心靈的な働きによるものです。

このセンターの二面性は快（^{プラス}）と、不快（^{マイナス}）です。これは表面的な外的な感覚にすぎません。しかし、これが心理的なものにまで影響を及ぼす



ことには、充分注意を払う必要があります。この表面的な感覚が我々の欲望の元になってしまうからです。これがエゴです。何か目新しい物を目にした時、それを自分ほとても気に入ったとします。まただれか、一人の人物を見ていやな印象を持ったとします。そこで、何としても気に入った物を手に入れようとか、いやな人物に対して悪い感情を持ったり、そのような態度、行動をとったりすれば、それはもう心理的な欲望にひきずられたということですから。エゴが自分の内的な意識よりも強かったというわけです。心理の問題の重要性がおわかりになるとと思います。

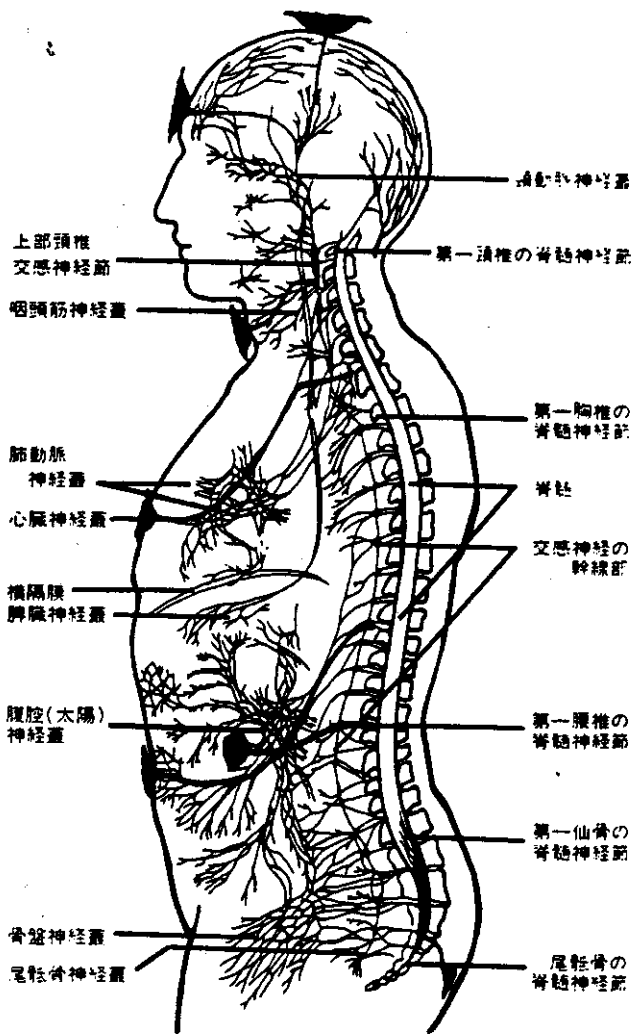
(3) 動作センター（運動センター）

これは首のつけ根のところにあつて、人体の動きのすべてをコントロールしています。すべてのことが大脳へ伝えられ、それで初めて動くことができます。これは本能のように備わっているものではなく、習っていくことによって身につくものです。赤ちゃんが立つことを覚え、ハイハイし、歩くことができるようになる、というようにです。そして身につけてしまえば、それはもう機械的に動いていくものです。ですから我々は日常的に、機械的に行動しています。だれでも考えてみなくとも歩き、走り、そしてまた頸椎をけがしてしまつたために、体の動きが不自由になつたりします。このセンターは行動と休息の二面性を持っています。

(4) 感情センター

これはおへそのところ、太陽神経叢のところにあります。ちょうど、知覚するリーダーのように外部からの印象、感情をキャッチします。また消化機能にも影響を及ぼします。ここで重要な点は、感情というものは本来、中性であるということです。しかし、我々は常に良い（^{陽性}）感情か、悪い（^{陰性}）感情かの、どちらかを持つというのが普通だと思ひます。でもそれは、我々の欲望やエゴ、また正しい知識が不足するために、自分自身がそのようにしてしまうわけです。そして大変感情的な時、そのような状態にある時は、その人自身、大変エネルギーを消耗しているのです。先程、オーラのことを説明しましたが、激怒している時は、我々を包んでいる卵形のようなオーラにどす黒い滴と、すさまじいばかりのいなすまが走っています。このように、我々の持つエネルギーが肉眼でこそ見えなくとも、これ程までに激しく発散されているのです。その本人は、体内のカルシウムを大変失ひ、また性エネルギーをも失ひ、それをとり戻すのは大変困難です。そして周囲の人達に大変悪い影響を及ぼしています。オーラに穴があくことさえあるそうです。

このように実際に、心理的にだけでなく、体にも非常に害があるために胃痛や胃けいれん、また結石の原因にもなつてしまひます。そこで我々は自分の感情、心理の動きに対して常に注意深くあらねばならないし、外部からの悪



チャクラと神経系
「チャクラ」より転載

い感情、印象が入ってくる前に防ぐ必要がでてきます。いかに自分で自分を守り、投げかけられる諸々の感情や印象を(そのようなエネルギーを)変換(トランスフォーム)していくかということが重要になってきます。

防御法

①.外出前など、深呼吸しおへそのところに自分の意識を集中させます。そして左手をおへそにあて、ゆっくり深く息を吸いながら物理的にも(肉体的にも)、心理的にも太陽エネルギーを吸収することに意識を集中させます。そして、そのエネルギーで防御膜を創るように想像を、イメージを描きます。実際に透明の膜がおへそにふたをして、悪い物をはね返すようにです。最後に息を吐く時は、炭酸ガスや不必要なものだけを出すように、大気中にある生命エネルギー、太陽エネルギー

はすべて体内に残す。そのように自分の意識や想念を動かして行うことが必要です。これは、たとえ見えなくとも、そのような膜を本当に創るためです。意識をもってとか、想念を動かして、ということが現実的にどのように“形”を成すのか、動くのか、ということについては後のテーマの時にお話します。

②.急な時は左手をすぐおへその上にあてふたをします。もう何も悪い物は入らない!と。ここで、なぜ左手なのかというと、右手は能動的な、手える手であり、左手は受動的、受けとる手だからです。ですから、もう受けとらない!と防ぐわけです。手当療法も、またキリスト教で祝福を手える時も右手で行うのはそういう理由があります。ですから日本ではよく家にお

塩をおき、厄除けにしますが、それは左手ではなく、右手か、何かを使って扱わなければなりません。

④下着に（おへその部分に）赤いものをつけておく、あるいは赤い下着を身につける。これは日本人にとっては突拍子もないように思えるかもしれませんが、しかし、赤という色は大変強い色です。物理的な法則の1つに、より強いエネルギーは、より弱いエネルギーを吸収するという法則があります。雷神、闘いの星と言われる火星の色も赤で表わされるように、赤という色は悪いエネルギーを吸収するだけの強い色であるということです。色については、音、波動のテーマでまたとりあげたいと思います。

⑤性センター

これは性腺のところにあり、この性腺は人体すべての内分泌腺に栄養を与えます。この「性」は生エネルギー、生命エネルギーであり、我々に生命を与える最も重要なものです。この性エネルギーを^男に向かわせれば、それは動物的に使われ、消費されてしまいます。女^女に向かわせるということは、性エネルギーを創造的に変化させることになります。つまり、性エネルギーである性ホルモンを消費ではなく再吸収させるということです。動物は本能的に発情期があり、それに従って生きています。しかし、人間だけは違います。人間はこのパワーある性エネルギー（ホルモン）を、意識をもって変化させ創造的なものに使っていくべき存在だということを意味します。このことについては、性のテーマの時に詳しく説明します。

以上、5つのセンターをあげてみました。我々にとって問題なのは、これらのセンターのアンバランスということです。5つのセンターを、物事に反応する速さという点で比較してみます。頭脳センターの速さを1とすると、本能、動作センターは3万倍です。それでころ水時や、目にゴミが入りそうな時は頭で考える前に手をついたり、目を閉じて防ぎます。そして手品やマジックは、目の動きより手の動きの方が速いため見破りにくいのです。感情センターは3万の2乗、性センターは更に速く3万の3乗のスピードです。これを最大限に利用しているのがコマーシャルや、街頭のポルノ的なポスターです。冷静に判断する前に感情的な、肉欲的な印象や判断をし、また悪影響を受けたり与えたりしてしまいます。また、どれか1つだけを極端に使うと、性センターのエネルギーを使って補います。我々の性エネルギーは、そのような目的のために使うべきものではありません。そして、アンバランスの度合によって、物質的な人、肉欲的な人、感情的な人、狂信的な人、理論的で計算高い人と、いろいろ問題を生じます。

我々が調和的に自己を保っていくためには、この5つのセンターだけでなく、肉体的に靈的に我々が持っているものを正しく知り、調和をもって働かせなければなりません。感情的な反感や、盲信、狂信に陥るのでなく、物事を正しく使うことを習う必要があります。間違いや失敗は、自分自身が見えないために犯し

ます。そして自分自身が本当により良くなることを願い、自分のいる段階を上げていくためには、自分自身を本当に深く知らなければならぬのではないのでしょうか。



万物が幸福でありますように
万物が幸運でありますように
万物が平和でありますように